



おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究室生活を経てUターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、
方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる
心理学・新潟学講師、日本語教師、経営学修士(MBA)、新潟郷土史研究会会員

著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）

「おもしろ えちご塾」（恒文社）

「郷土とことわざ」「ことわざを楽しく学ぼう、社会・文化・人生」

（人間の科学新社・共著）

「明治大学政経論議 2016年度（新潟美人）」（明治大学政治経済研究所）等

「こみともね」

A氏「こみともので、こみともので、ほんねこみともねて！」

B氏「おばまた、どうしなったね？」

A氏「こんげなって、あんげなって、かくかくしかじか…（個人情報のため省略）」

B氏「わいや、おおたいぎしなさったね。云々かんぬん…（同上理由で内容省略）」

こみともねとは、新潟県の下越を中心とした地域とその近辺の中越の一部で使われることばです。「標準語に訳しなせや」といわれても、「う～む、こにくたらしいというか、腹立たしいというか、とにかくにも、事物や他人に対してマイナスの感情を大いにもっている状態やそのさまを表すんだて」としか答えられません。そのため、本来でしたら上のA氏とB氏の会話を共通語に訳して解説するところを、ここではやむを得ず原文ママといたしますのでご了承ください。

その土地のことばには、どうしても共通語に訳しにくいことばが多くあります。たとえば、全国的に認知度が高い「しばれる」ということば。これは主に青森県、岩手県、秋田県、そして宮城県と山形県の内陸部で非常に寒い、冷えるという意味で使われています。

地元の古老に共通語訳は？と教えを請うても「寒めえなんでもんでねえ、冷えるなんでもんでねえ、凍るでもねえ、凍みるでもねえ、しばれるは、すん・ば・れ・る！それよか、まんず、こっちさけ（来い）、く（食うか？）、け（食べなさい）、め（飲みなさい）」で小宴会の始まりです（秋田にて）。まさに方言は、その土地で暮らしてこそ口のできることばといえましょう。

さて、上記のこみともねもその土地の中で、それも小さな地域の中で生まれてきたことばです。実は、こみともねが採取できる阿賀北のある地域には、「昔の人は声が大きいので、人の悪口はあまり言わない」という言い伝えがあります。かつて農・漁業で栄えたこの地の共同体維持のために、悪口厳禁、しかしそこは人間、小声でホンネ、極々親しい人には思わず吐露してぼやくことばが「こみともね」というわけです。

「憎たらしい相手をもう二度と見ともね（見たくもない）」の「みともね」に、接頭語の「こ」が付いていっそう憎々しげに「こみともね」になったのかはわかりませんが、話し手のいらつき度や不満が伝わることばだと思います。なお、同様のことばで、「こづらに～くい」という言い方も県内にはみられます。相手の顔を見るのも嫌ですて、ということで「面（つら）が憎い」に、これまた接頭語「こ」が付いて「こづらにくい」というのでしょうか。こみともね、こづらにくい、こやかまし、こきたね、と「こ」が付くだけで、その状態がいっそうひどくなる「こ」の威力！「こづらにくい」は、なぜか名古屋でも方言として使われていることが最近判明して、これまた「こめんどくっせ」ことになりつつも、地域のことば探求は奥深くてやめられそうにもありません。

（こづらにくいとは、共通語とする辞書もありますが、その語感や言い回しから地域のことばとします）

